一高／獨逸

第一高等学校資料に見る日独交流史
2011/10/15〜12/04

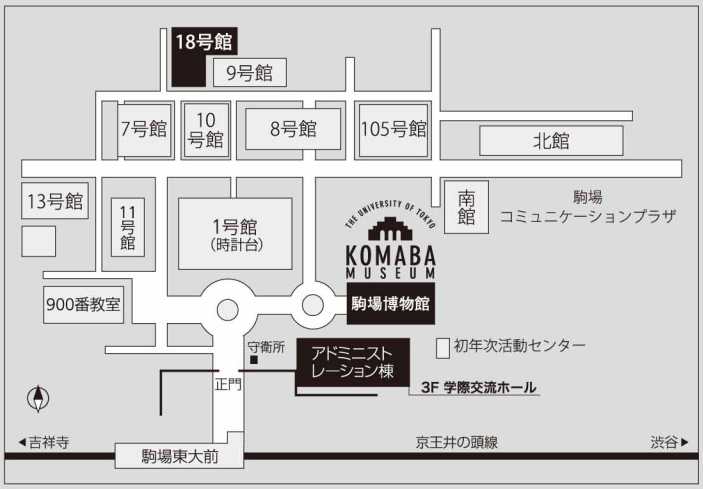
2011 年は、日本がプロイセンと修好・通商・航海条約を 1861 年に結んでから 150 年にあたる年であり、日独両国で関連の催しが開かれています。当博物館でも、この機会に、収蔵品中の大きな部分を占める第一高等学校（一高）旧蔵資料を用いて、高等学校の教育や生徒の活動を通してみた日独交流史に関する展示を行うこととしました。

明治維新後の日本に西洋文明が押し寄せる中、法律・哲学・文学・科学・医学・技術などの分野でドイツの文物が好まれ、また国家体制が確立するうえでもドイツの学問や制度が影響を与えたことはよく知られています。その反面、三国干渉に見られる通り、ドイツは決して日本には好意的ではなく、第一次大戦では敵国同士として、日中戦争でも中国を介して戦い、防共協定や三国同盟の後にも裏切りと言ってよい仕打ちで日本の指導者たちを混乱に陥れたことがありました。

高等学校の生徒たちの文化にも、よく知られている通り、ドイツの色濃い影響を見ることができます。「ゲル」（Geld の略でお金）、「ゾル」（Soldat の略で兵隊）などのドイツ語に由来する隠語は、第二外国語、或いは第一外国語としてドイツ語を学ぶことの多かった高校生の間で生まれましたが、専門学校・師範学校など、第二外国語はあっても多くの時間は割けない他の系列の学校の生徒たちに対する、暗黙のうちの優越感を示しているように思われます。高等学校で触れる哲学者「デカンショ」（デカルト・カント・ショーペンハウアー）のうち 2 人はドイツ人であり、マルクス主義に原著で挑戦するのも、ヘッセやトーマス・マンに親しむのも高等学校でのことでした。

一方で、戦前の日本人の意気は高く、特に、国家を担うことを期待されていた高等学校の生徒たちは、ドイツを師父の国として崇めるばかりではありませんでした。ドイツとの交流にも、日本の世界における位置に関する敏感な意識の反映を読みとることができます。三国干渉にドイツが加わったことを高等学校生徒はよく覚えており、第一次大戦における対独戦に勝利した後には、一高では青島陥落の祝賀会が開催され、またこれを記念する歌が作られました。1915 年には、ドイツから得た南洋の島々を巡る航海に、一高の生徒も参加しています。1922 年にアインシュタインが来日した際には、反相対論を掲げて講演後に質問に立った一高の講師もおり、生徒の中にはその挑戦を称える者もありました。1938 年に、駒場の地をヒットラー・ユーゲントの一団が訪問した際には、高校生同士のしきたりに倣い、腰手拭いに下駄の弊衣破帽と「バカヤロー」の挨拶で、清潔な服装と秩序だったふるまいの際立つ彼らを「歓迎」しました。歓迎の演説も、ドイツ語でできなかったわけではないでしょうが、対等な立場にあることを意識して日本語で行いました。ただし、通訳も付けなかったために全く理解されず、また、日本での訪問先でヒットラー・ユーゲントの一団が最も悪い印象を抱いたのは一高であったといいます。

今回の展示では、ドイツと旧制高校と言えばすぐに思い浮かぶ、哲学・文学などの分野ではなく、ドイツ語教育、科学・工学教育、生徒の活動などに焦点を合わせました。これにより、従来あまり知られることのなかった日独交流史の側面を紹介し、必ずしも日本が学ぶ一方ではなかった実態を明らかにすることに努めました。後ろ向きで反未来志向の展示ですが、お楽しみいただければ幸いです。



東京大学 駒場博物館 アクセス：
京王井の頭線「駒場東大前」駅東口より徒歩約 3 分。駐車場等ございませんので公共交通機関をご利用下さい。

高校生のための金曜特別講座
2011年10月28日(金)　17:30〜19:00
東京大学駒場Iキャンパス 18号館ホール
「ヒットラー・ユーゲントのバカヤロー！　愛憎の一高日独交流史」
岡本拓司(本学准教授)
http://high-school.c.u-tokyo.ac.jp/lecture_time/2011w.html

東京大学第62回駒場祭関連企画
2011年11月27日(日)　10:00〜11:30
東京大学駒場Iキャンパス　アドミニストレーション棟学際交流ホール
「愛憎の日独交流史：第一高等学校篇」
岡本拓司(本学准教授)
http://www.a103.net/komabasai/62/visitor/

お問い合わせ：東京大学駒場博物館　153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1
Tel: 03-5454-6139　Fax: 03-5454-4929　http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/